

現代日本を日本語で人類学する――厚い記述はどう知の生産に貢献できるか（仮）

本特集では次の2点について議論する。1. 現代日本をテーマにした日本語での人類学はどのような知を生み出すことができるのか。2. 英語で研究成果を発表することで、日本語で書く場合にどのような知を還元できるのか。この二つは一見別々の問いであるように見えても、実際には深く関わっている。現代日本をテーマにした人類学的研究は、英語圏で一定数存在するものの、その全てが日本語へ翻訳されているわけではない。また、桑山(2008,2015)が指摘するように、英語圏と日本語圏の日本研究は互いに参照されないことも多く、英語での日本研究は英語圏のオーディエンスに対し、日本を異質な他者として描き出す傾向が依然として存在する。

日本語での文化人類学において、現代日本での生活を対象にした研究の一部は、災害(2013年78号1巻の特集)、介護(2005年70巻3号)、科学技術(2007年71巻4号)や医療(ゲルゲイ2008、照山2019)性的少数者(砂川2015、新ヶ江2018)そして巡礼などをテーマにした民俗学的研究(門田2013)をなどが挙げられるが、全体的に数は多くない。隣接分野である質的社会学の研究と比較すると、人類学は長期のフィールドでの調査を方法論の根幹とする違いがある。この調査方法は、その場限りのインタビューや質問票を一斉に配布して回収するといった方法よりも、より対象に即した記述が可能となる。一方で調査には時間と費用がかかり、分析に際しても社会学の隣接分野と比較して一般化・理論化が不十分であると評価される場合もある。

現代日本を対象にした人類学的研究を行い日本語で執筆する場合、いくつかの困難が存在する。まず、英語圏での日本研究のフィールドに身を置いた研究者が執筆する場合、日本についての背景知識が少ない読者にとっては十分な「発見」であっても、日本語圏の読者にとっては必ずしもそうは受け取られない場合も多い。また、英語圏と異なり、日本語の社会学には質的研究の蓄積が厚く、現代社会における生活をテーマにした研究がすでに数多く存在する。この場合、日本語で人類学的研究を行っても、必ずしもその理論的枠組みや視点、方法論が斬新であると評価されないこともある。

異文化を理解し(その結果、自文化を知る)という人類学の研究目的と、「厚い記述」を重視する方法論は、現代日本をテーマにした質的研究にどのような貢献ができるのだろうか。本特集では現代日本をフィールドとして、二言語で発表を行う研究者の論考を通じて、上記2の問いに対しての答えを探る。

* 投稿に関しては、「文化人類学」編集委員会による審査と、査読者による審査の過程を経る。

* 現代日本をテーマにしていればどのようなテーマでも応募を歓迎するが、日本語と英語の両言語での学会発表や出版経験があることが望ましい。

* 特集企画者は平野邦輔（東京経済大学全学共通教育センター特任講師）、企画担当者はゴロウィナ・クセーニヤ（東洋大学社会学部准教授）

「文化人類学」は日本を代表する学術誌であり、年4回刊行されている。

刊行から一年以上経ったものは、こちらから無料で閲覧・ダウンロード可能

<https://www.jstage.jst.go.jp/.../86/1/ contents/-char/ja>

<日程>

論文題目と要旨（100字）の締め切り：9月18日(提出先: hiranok@umich.edu)

一次審査の結果通知：9月30日

初稿の締め切り：2023年2月28日

その後、編集委員会と査読者による査読を経て、最終的な掲載を決定。